女三の宮前史を読む

――もう一人の藤壺の呼び覚ますもの――

三村　友希

一　はじめに

『源氏物語』第二部は、朱雀院の病とそれゆえの出家の願いと、後に残される鐘愛の女三の宮に対する不安との葛藤によってひらかれる。女三の宮は、藤壺の中宮の姪、紫の上の従姉妹であり、〈紫のゆかり〉の女君であった。女三の宮のあまりの幼さは、物語の負の原動力として機能する。また、母女御をはやくに失い、今また父院の手から離れなければならないという孤児性をたたえて六条院に降嫁してくる女三の宮は、清水好子氏の「繰り返される過去」という観点[1]に照らせば、〈もう一人の紫の上〉である[2]。

そして、女三の宮の母女御は〈もう一人の藤壺〉であった。若菜上巻の冒頭に藤壺の中宮の異母妹の存在を俄かに示すというのは、過去に向かって新たな視界をのぞかせる作為的な設定である。「世の中を恨みたるやうにて」（若菜上五／一二　なお本文の引用は新潮日本古典集成により、巻数と頁数を記す）とされる死や、女三の宮の年齢が十三、四歳であることなど、断片的な情報から推測される〈もう一人の藤壺〉の語られなかった物語は、第二部の物語の始発において暗い影を落としているように思う。女三の宮は、この母女御とともに物語の世界に立ち現われるのである。

〈もう一人の藤壺〉の物語を、語られた物語の過去と可能な限り符合させてみると、現在と過去の共鳴する連続性が見えてくる。女三の宮の登場も過去からの侵蝕であり、「繰り返される過去」であるばかりでなく、過去と一筋に結ばれる時間の流れの中に位置するものであることがわかるのである。語られなかった時間を物語の裏側で生まれ、成長してきた女三の宮の降嫁によって、その時間の連続性を最も痛切に受けとめざるをえないのは、紫の上であろう。〈もう一人の藤壺〉の物語は、第二部の冒頭にあって、光源氏の物語を裏側から照らし返し、二人の〈紫のゆかり〉の苦悩と病への扉のような役割をも果たしているのではないだろうか。〈もう一人の藤壺〉に照明をあてて女三の宮前史を探り、その過去が現在にどのように作用し、何を呼び覚ましているか、その意味を考えたい。

二　もう一人の藤壺

御子たちは、春宮をおきたてまつりて、女宮たちなむ四所おはしましける。そのなかに藤壺と聞こえしは、先帝の源氏にぞおはしましける。まだ坊と聞こえさせし時参りたまひて、高き位にも定まりたまふべかりし人の、取り立てたる御後見もおはせ

ず、母方もその筋となくものはかなき更衣腹にてものしたまひければ、御まじらひのほども心細げにて、大后の、尚侍を参らせたてまつりたまひて、かたはらに並ぶ人なくもてなしきこえたまひなどせしほどに、気おされて、帝も御心のうちにいとほしきものには思ひきこえさせたまひながら、おりさせたまひにしかば、かひなくくちをしくて、世の中を恨みたるやうにて亡せたまひにし、その御腹の女三の宮を、あまたの御なかにすぐれてかなしきものに思ひかしづききこえたまふ。そのほど御年十三四ばかりおはす。今はと世を背き捨て、山籠りしなむ後の世にたちとまりて、誰を頼む蔭にてものしたまはむとすらむと、ただこの御ことをうしろめたくおぼし嘆く。

（若菜上五／一一～一二）

若菜上巻の冒頭において、朱雀院の病と出家の意志、弘徽殿の大后の死に続いて、朱雀院には四人の皇女があり、中でも女三の宮の将来を案じて出家することもできないという、藤裏葉巻までには語られていなかった事実が明らかにされる。その母で先帝の源氏であった「藤壺」が、後見もなく「心細げ」な暮らしぶりで、「高き位にも定まりたまふべかりし人」であったのに、弘徽殿の大后が朧月夜を朱雀後宮に送り込み、その勢いに「気おされて」、朱雀院も「御心のうちにいとほしきものには思ひきこえ」つつも譲位した後に、「かひなくくちをしくて、世の中を恨みたるやうにて亡せ」てしまったのが不憫で、残された女三の宮をとりわけ慈しむのだという。新しい女主人公の両親を紹介する中で、第一部においては語られていなかった「藤壺」という女君が不意に浮上してきたのである。

朱雀院が桐壺巻で立坊し、葵巻の冒頭で即位していることから、花宴巻までの間に入内し、澪標巻はじめの譲位の後まもなくの死か、と推測されてくる。「先帝の」とあることから藤壺の中宮の異母妹であろうことが示唆されており、藤壺の中宮の紹介が「先帝の四の宮の、御容貌すぐれたまへる聞こえ高くおはします、母后世になくかしづききこえたまふ」（桐壺一／三三）とあったのを意識すれば、母后と更衣の身分のちがいと、「高き位」についた姉とつくことのできなかった妹という図式を描くことができる。おそらく異母姉よりもはやく、まだ幼い女三の宮を残しての早逝ということになり、「世の中を恨みたるやうにて」というのは尋常ではないように感じられるのである。この「藤壺」が藤壺の中宮の異母妹であることをはっきりと示すのは、光源氏であった。女三の宮との縁談を断わろうとする中で、光源氏は女三の宮が〈もう一人の紫のゆかり〉であることを自覚し、むしろ女三の宮を引き寄せる結果になってしまうのであったが、それというのも「この皇女の御母女御こそは、かの宮の御はらからにものしたまひけめ。容貌も、さしつぎには、いとよしと言はれたまひし人」（若菜上五／三四）であったからなのだ。このような〈紫のゆかり〉の女君が過去に存在していたとされるのは驚くべき事実である。[3]

さらに、藤壺の女御は、東宮の母である承香殿の女御との間に「いどみかはし」（若菜上五／一四）たことがあったという。藤壺の女御が「人よりはまさりて時めき」（同）、二人の女御の間に寵愛争いがあったため、女三の宮の後見を承香殿の女御に期待することはできない、と朱雀院の不安は高まるのである。承香殿の女御は「すぐれたる御おぼえにしもあらざりしかど」（若菜上五／一三）とされている。「人よりはまさりて」の「人」とは承香殿の女御を指すの

だろうが、それは東宮誕生より以前の序列であった。朱雀院の譲位後、藤壺の女御が「かひなくくちをしくて、世の中を恨みたるやうにて亡せ」たころ、「春宮の御母女御のみぞ、とり立てて時めきたまふこともなく、尚侍の君の御おぼえにおし消たれたまへりしを、かくひきかへめでたき御幸ひ」（澪標三／三〇～三一）の日々を送っていたのである。朧月夜に「気おされ」た藤壺の女御と同様に、承香殿の女御も朧月夜に「おし消たれ」ていたのが、朱雀院の唯一の男御子を儲けたことによって「いどみかはし」た藤壺の女御を逆転して、「ひきかへめでたき御幸ひ」を勝ち取った。

注目されるのが、女三の宮誕生の時期である。金田元彦氏は「女三の宮を十三四歳とすると、藤壺女御が女三の宮をみごもった時期は、丁度朧月夜の尚侍が、『わらは病』のため、里邸に退出して、朱雀帝の後宮にいなかった、足掛け二年の間と符合する」と指摘している。[4] 加えて、東宮の誕生を「二つになりたまへば」（明石二／二九五）とあるところから計算すると、ほぼ同時に承香殿の女御も東宮をみごもったことになり、二人が「いどみかはし」た緊張感や、どちらが先に男御子を生むかという競争意識があったことも想像されてくるのである。[5] 若菜上巻の冒頭の時点で「十三四ばかり」になる女三の宮が、十三歳になる東宮よりも僅かにはやくに生まれたのであろう。藤壺の女御の方が先に妊娠の兆しを見たものの、生まれたのは期待に反して皇女であったことになる。葵の上について、「伊勢の御息所との恨み深く、いどみかはしたまひけむほどの」（若菜上五／九一）とも言われていることからも、藤壺の女御と承香殿の女御の「いどみかはし」た過去の軋轢が、「恨み」をともなうような厳しさであった可能性もうかがえるであろう。朱雀院もその周囲も、朧月夜腹の男御子の誕生をこそ期待していたと思われるが、その朧月夜の留守に、妊娠と出産という女性の身体の生理が二人の女御の運命を揺り動かしたのである。

三　「世の中を恨みたるやうにて」

朧月夜、藤壺の女御、承香殿の女御の微妙な序列の構造が見えてきた。藤壺の中宮の異母妹である藤壺の女御は、弘徽殿の大后にとっては目障りな存在であったかもしれない。「帝も御心のうちにいとほしきものには思ひきこえさせたまひながら」というのは、藤壺の女御をとりまく事情を想像させる。「世の中を恨みたるやうにて」の「世の中」という言葉は、そこから疎外された者の、距離を置いたところから見つめるまなざしを感じさせるのである。[6] 「高き位にも定まりたまふべかりし人」であったのに果たせなかった「恨み」と、「心細げ」な宮仕えを続ける中で、朧月夜に「気おされて」、承香殿の女御と「いどみかはし」て敗北した「恨み」が、藤壺の女御を不幸な死に導いた。

実は、「藤壺」の呼称をもつ人物がもう一人いる。今上帝の藤壺の女御である。

そのころ藤壺と聞こゆるは、故左大臣殿の女御になむおはしける。まだ春宮と聞こえさせし時、人よりさきに参りたまひにしかば、むつかしくあはれなるかたの御思ひは、ことにものしたまふめれど、そのしるしと見ゆるふしもなくて年経たまふに、中宮には、宮たちさへあまた、ここらお　となびたまふめるに、さやのこともすくなくて、ただ女宮一所をぞ持ちたてまつりた

まへりける。わがいとくちをし　く、人におされたてまつりぬる宿世、なげかしくおぼゆるかはりに、この宮をだに、いかで行く末の心もなぐさむばかりにて見たてまつらむと、かしづききこえたまふことおろかならず。（宿木七／一五一）

「人よりさきに」入内して、今上帝の「むつかしくあはれなるかたの御思ひ」は格別であったのに、明石の中宮には及ばず、女二の宮をせめてもの慰めに大切にしていたが、女二の宮が裳着を迎えようとするころ、藤壺の女御は「もののけにわづらひたまひて、いとはかなく亡せ」（宿木七／一五二）てしまう。女二の宮にはしっかりとした後見もなく、やはり今上帝を悩ませて、「朱雀院の姫宮を、六条の院にゆづりきこえたまひしをりの定め」（同）を思い出して、薫を婿にと決定するのである。日向一雅氏は「どうして女三宮や女二宮が朱雀や今上の特別の関心の的なのか。その『なぜ』を解き明かすものとして、怨みと償い、鎮魂の論理は導入されてくるのであり、かれらが女宮たちのために行動する内的な動機づけであった」と指摘する。[7] 今上帝の藤壺の女御は、入内した時点においては「左大臣殿の三の君参りたまひぬ。麗景殿と聞こゆ」（梅枝四／二六四）とあって、その後、何らかの事情で局を移したらしい。朱雀院の藤壺の女御と重ねるべく、ここで女二の宮の母を「藤壺の女御」とすることに意味があったのではないだろうか。

光に満ちた藤壺の中宮にくらべて、二人の藤壺の女御は影を帯びており、女三の宮の母藤壺の女御の「世の中を恨みたるやうにて」と語られた死は物語の底に沈められている。語られない、そのことじたいが藤壺の女御の生き方であった。問題は、そのような藤壺の女御の生と死の意味を受けとめる者の内側にある。「世の中を恨みたるやうにて」は、朱雀院の主観的な視線によってくくられた、「やう」に見えた藤壺の女御像であり、朱雀院の中にくすぶる悔恨と呵責が見え隠れする。藤壺の女御の非業の死は、朱雀院に対する最後のメッセージであった。自殺的な行為によって朱雀院の愛情を女三の宮に向かわせた、壮絶な母の愛としても理解されている。[8]

四　鏡像としての女三の宮

藤壺の女御は、「先帝の更衣と藤壺女御の、母娘二代の哀史をとりこみながら、女三の宮の存在が告げられる」[9]という方法の中に登場してきた。ここに先帝の更衣――藤壺の女御女三の宮という系譜を取り出すと、それは母北の方――桐壺の更衣――光源氏の系譜に重なり、北山の尼君――故姫君――紫の上の系譜をも見出すことができる。紫の上の母である故姫君は、入内が望まれていたものの、父按察使大納言を失って、兵部卿の宮がひそかに通うようになったが、その北の方の嫉妬を受けて病むようになり、死に至った。北山の僧都は「もの思ひに病づくものと、目に近く」（若紫一／一九六）見たという。この母の受けた仕打ちが紫の上にも及ぶかもしれず、病がちな尼君にとって、幼い紫の上は悩みの種であった。

「恨み」とは「いつまでも不満に思って忘れない。相手の気持を不満に思いながらじっと忍ぶ」（岩波古語辞典）ことである。閉ざされた思いが胸にうずまき、故姫君が「もの思ひに病づ」いたように、しだいに藤壺の女御の身体を蝕み、やがて死に至ったのであろう。心の奥底に巣くった苦悩や嫉妬、不安、不信は、それらを隠しつつ生きていかねばならない緊張に堪え切れなくなったとき、病や

死というかたちで外面に表われてくる。女三の宮も紫の上も同じように、「もの思ひに病づ」いた母を失い、残る庇護者の愛情と不安を駆りたてるところから、その生を出発していた。そして、光源氏も同じ過程をたどっていた。しかし、桐壺の更衣は「恨み」を負った側であったとされる。

いづれの御時にか、女御、更衣あまたさぶらひたまひけるなかに、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めきたまふありけり。はじめより我はと思ひ上がりたまへる御かたがた、めざましきものにおとしめ嫉みたまふ。同じほど、それより下臈の更衣たちは、ましてやすからず。朝夕の宮仕えにつけても、人の心をのみ動かし、恨みを負ふ積りにやありけむ、いとあつしくなりゆき、もの心細げに里がちなるを、いよいよあかずあはれなるものに思ほして、人のそしりをもえ憚らせたまはず、世のためしにもなりぬべき御もてなしなり。（桐壺一／一一）

桐壺の更衣は、「いとやむごとなき際」ではないにもかかわらず、「すぐれて時め」いてしまった。後宮における身分秩序の掟を破った桐壺の更衣は、ほかの女御や更衣に妬まれ、世間の非難を浴びて、「恨みを負ふ積り」のためか、しだいに体調を崩していった。母北の方も「人の嫉み深くつもり、やすからぬこと多くなり添ひはべりつるに、横様なるやうにて」（桐壺一／二三）と桐壺の更衣の死を規定している。これは、故姫君の「もとの北の方、やむごとなくなどして、安からぬこと多くて、明け暮れものを思ひてなむ、亡くなりはべりにし」（若紫一／一九六）という軌跡に通じる。周囲からの恨み、嫉妬が桐壺の更衣の上に「つもり」、病づき、ついに息絶えたのであった。

桐壺の更衣の残した唯一の言葉「限りとて別るる道の悲しきにいかまほしきは命なりけり　いとかく思うたまへましかば」（同）について、光源氏の立坊にまで及ぶのだという指摘がある。[10] 後になって明らかにされる父故按察使大納言の遺言からは、周囲からの迫害に必死に耐えて、家の再興を願っていた桐壺の更衣の像が見えてくるのである。「横様なるやうにて」という表現の裏にもっと深い真実が隠されていたのかもしれない。そのように読むと、桐壺の更衣を死に追いやったのが周囲の女たちの「恨み」であった一方、[11] 桐壺の更衣自身もまた、ひそかな野望を達成しようとする途中で病に倒れた「恨み」とでも名づけられるような執着を胸にしまったまま逝ったことになる。[12] その無念さを知った桐壺帝が光源氏に寄せる思いは、朱雀院が女三の宮に寄せる思いに重なる。男源氏の物語に対する女源氏の物語である。[13] また、やはり大納言であった父の入内への夢を果たせなかった故姫君と、遺言をかたくなに守り貫いた桐壺の更衣は、鏡像関係にある。

桐壺の更衣の悲恋の影にそのような欲望と挫折が認められるように、藤壺の中宮の入内についても、桐壺帝の私的なゆかりの恋であったばかりでなく、弘徽殿方をおさえるための政治的な配慮であったり、先帝一族の王権奪回を計った策であった側面も見えてくる。[14] また、後見のない藤壺の女御が入内を果たした背景も[15]加えて考えると、藤壺の女御の「世の中を恨みたるやうにて」の死も、ちがう響きをともなってくる。朱雀後宮は、父桐壺帝の後宮を模倣しているような印象を受ける。「承香殿」は、桐壺帝の第四皇子の母女御から今上帝の母女御に継承されたが、後宮全体から見て目立たない女御が居所としている。今上帝が即位したとき、承香殿の女御はすで

に他界しており、[16] 新帝の生母として皇太后位を追贈されたのも「もののの後のここちして」（若菜下五／一五〇）とされる。「弘徽殿」は姉大后から、はじめ登花殿にいた妹の朧月夜に譲られた。同じく「藤壺」も異母姉から異母妹に受け継がれたのであったが、この場所だけが明から暗へとその内実を変化させていることに気づく。歴史的に見れば、弘徽殿が最も勢力のある家の出身の女御や中宮のいるべき場所であったのに対して、藤壺は必ずしもそうではなかったという。[17] 藤壺の中宮の方が異例であったと考えられるのであるが、その落差は効果的に作用しており、無視できない。三人の藤壺の狭間にあり、光から影に「藤壺」のイメージを塗り替えた、女三の宮の母藤壺の女御の意味は重い。

藤壺の中宮も、秋好中宮も、明石の中宮も源氏であり、その身分にふさわしい寵愛を受け、中宮に立ったが、藤壺の女御はどちらも叶わなかった。その前に立ちはだかったのが、弘徽殿の大后の妹である朧月夜であったことから、桐壺の更衣の面影を藤壺の女御に見ることができるであろう。桐壺の更衣や故姫君、あるいは夕顔などの受けた傷が、藤壺の女御のおぼろげな輪郭を肉体化させ、女三の宮を物語に送り出すのである。

五　紫の上に投げかけるもの

寵愛というレベルで後宮という政治の場を闘っていた女たちにとって、帝にどれだけ愛されるかが我が身を規定する基準であった。藤壺の女御の「恨み」は、朱雀院にこそ理解できる思いであった。異母姉の影に隠れたような藤壺の女御を母に、異母弟の光源氏よりも常に劣るように造型されている朱雀院を父に、女三の宮は生まれたのである。

母女御の「恨み」を克服させようとするかのように、あるいはその許しを請うかのように、朱雀院は、女三の宮に中宮幻想を投影する。朱雀朝は中宮を欠いており、[18] やがては朧月夜を女御に、さらに中宮にという弘徽殿方の思惑も、光源氏との密会の露顕によって崩れてしまった。[19] 姉の藤壺の中宮と同じように、この藤壺の女御も中宮とすべきではなかったか、という後悔が朱雀院を駆り立てたのであろうか。朱雀院は、女三の宮を幻想の中宮に飾り立てようとし、[20] その降嫁も六条院入内の様相をかいま見せるのである。[21] 女三の宮が病重い朱雀院の手許にいた時点においては色濃く見られた孤児性は、六条院降嫁の後は払拭されていく。それは、紫の上が「身のほどなるものはかなきさまを、見えおきたてまつりたるばかりこそあらめ」（若菜上五／七八）とあるように、自分自身の境遇の不安定さに思い至ったことと無縁ではない。

紫の上は、女三の宮の降嫁の決定を聞き、冷静に受けとめようとする。

いとつれなくて、「あはれなる御ゆづりにこそはあなれ。ここには、いかなる心をおきたてまつるべきにか。めざましく、かくてなど咎めらるまじくは、心やすくてもはべなむを、かの母女御の御方ざまにても、うとからずおぼし数まへてむや」と、卑下したまふを、……。（若菜上五／四四～四五）

〈紫のゆかり〉の糸が張りめぐらされていることなど知らない紫の上にとって、これは「かく空より出で来にたるやうなること」「のがれたまひがたき」もので「おのがどちの心よりおこれる懸想」（若

菜上五／四五）でもない結婚なのだから、「をこがましく思ひむすぼほるるさま、世人に漏り聞こえじ」（同）「人笑へならむことを、下には思ひ続けたまへど、いとおいらかに」（若菜上／四六）とあるように、内面を隠して、自尊心だけは守ろうと努める。「いとつれなくて」は、光源氏への不信感を如実に示している。以後も「つれなくのみもてなして」（若菜上五／五四）「つれなくまぎらはしたまへど」（若菜上五／五七）と繰り返されていく。動揺や失望、「思ひ」を閉じ込め、平静を装う紫の上は、ありのままの感情を素直に表現することをみずからに禁じてしまう。〈紫のゆかり〉というあやうい運命を拠り所に、盗まれるように二条院に引き取られた身の上や、父宮にも知らせずにひそかに新枕を交わした経緯など、紫の上の孤児性が浮上してくる。朱雀院はもちろん、「かの母女御の御方ざまにても」とあるように、叔母にあたる藤壺の女御も紫の上を抑圧するのである。[22]

女三の宮の幼さが明らかになるにつれて、六条院は歪みを露呈する。斎藤暁子氏は、愛情の問題に参加する資格さえも女三の宮には与えられず、背後の父朱雀院の思惑に配慮しなければならない事態は後宮の姿に同じであると説く。[23] 六条院に持ち込まれた世俗的な現実は、女三の宮を包む父朱雀院と母藤壺の女御の生きていた世界であり、紫の上にとっては得体の知れないものだ。紫の上は、そのような世俗的な価値観ではなく、その美質や愛情、信頼によって男女のかかわりを築いてきた。それは桐壺の更衣や紫の上の母故姫君、藤壺の女御が実現することができなかった稀有なあり方ではないだろうか。しかし、〈もう一人の紫の上〉である女三の宮を鏡にして向かいあうとき、紫の上の存在の綻びがあらわになった。今、「思ひ」を隠し、光源氏には踏み込めない内面をもちはじめた紫の上は、母が破れた孤独な闘いに、やはり挑まねばならないことに静かに抵抗している。女三の宮の孤児性は、その内実と裏腹に、六条院を揺るがし、紫の上の内面を押し込めてしまう力に変貌したのである。

六　紫の上の「思ひ」「世の中」

女三の宮の降嫁は、光源氏と紫の上の間に、もはや愛情では解決できない亀裂を生じさせた。しかし、そのためにすべてを否定できる二人の歴史ではない。紫の上は、眠れぬ夜に「かの須磨の御別れ」（若菜上五／五九）を思い出して、現在の苦しみをも肯定しようとする。あのころは光源氏がただ同じこの世に生きているだけでいいと思っていたではないか、あの危機を乗り越えたからこそ今の二人があるのだ、それに較べれば耐えられるはずだ、と「おぼしなほし」（同）すのである。

その一方で光源氏は、朱雀院の出家にともなって二条の宮に退出していた朧月夜に、六条院のはらむ緊張から逃れるように吸い寄せられていく。この再会を語るあたりには「昔」「いにしへ」といった語が多く見られ、過去をよみがえらせる仕掛けが施されて、「世の騒ぎ」「その世」などの語が朧月夜のためにさすらった須磨流離を幾度も呼び起こしている。[24] 秋山虔氏は、「この光源氏対朧月夜の数段の世界は、それが接続するところの、それまでかかれてきた世界の展開を、そこから逸脱することによってなおおしすすめるものである」とし、さらに「光源氏ー紫上ー女三宮のきびしい矛盾の世界を、第一部以来の茫洋たる人生の流れの中に相対的に位置づける

ものとなっている」と指摘した。[25]

逸脱は、逸脱に終わらない。女三の宮誕生の時期を再び顧みると、藤壺の女御が入内から久しくして妊娠の機会を得たのは、光源氏との密会が露顕して謹慎していた、朧月夜の不在のときのことであったのだ。そして、朧月夜に「気おされて」「世の中を恨みたるやうにて」藤壺の女御が死を遂げたことが、朱雀院の女三の宮に対する偏愛を招き、その過剰な不安から六条院降嫁を導くことになった。[26]紫の上が過去の試練として据え直す「須磨の御別れ」の直接的な原因となった密会露顕がなければ、女三の宮誕生はなかったかもしれない。過去が現在をすでに宿していたという事実に突きあたるのである。後藤祥子氏は「女三宮への物足りなさから光源氏が朧月夜を求め、女三宮密通が露顕したところで朧月夜の出家が語られるといったこの人の登場場面の時機や方法は『もとよりづしやかなる所はおはせざりし人』の、この一件への道しるべ的役割を見るように思う」と示唆しているが、[27]さらに過去に遡らせてみても、同じことが言えそうである。

「世の中を思ひ知るにつけても」（若菜上五／六八）「さまざまに世の中を思ひ知り」（若菜上五／七二）と繰り返される朧月夜の知った「世の中」は、光源氏との過ちを許し、変わらぬ愛情を注いでくれた朱雀院と過ごした時間が朧月夜に教えた「世の中」であり、光源氏に対する恋を貫くこともできず、朱雀院の愛情に応えることもできない朧月夜の覚えた「世の中」なのであろう。藤壺の女御の「世の中」が疎外されることによって「恨む」ものであったとすれば、朧月夜の「世の中」はそれに対置される、朱雀院のあたたかさに触れて「知る」痛みであったことを確認しておきたい。

現在と過去の時間を、朧月夜という回路を通して、一つの連続する時間として縫い合わせるとき、紫の上が築いていた世界が砂の城のようなもろさを隠蔽していたにすぎなかったことを知らされる。物語の裏側で女三の宮が成長していた間、紫の上は、六条院の女主人として君臨していた。乗り越えたはずの試練は、新たな試練をすでに抱え込み、〈もう一人の紫のゆかり〉であり、〈もう一人の紫の上〉である女三の宮の成長を待って、紫の上を襲ったのである。光源氏と朧月夜との回顧的な再会に際して、紫の上が「昔を今に改め加へたまふほど、中空なる身のため苦しく」（若菜上五／七五）と思わず涙を見せて、封じ込めた内面を解いてしまったその告白も、「昔」と「今」の時間の錯綜とずれを示して痛々しい。もはや紫の上は、光源氏の慰撫によって癒されることはない。

抱えた闇を、紫の上は手習いによって自覚する。

手習などするにも、おのづから古言も、もの思はしき筋にのみ書かるるを、さらばわが身には思ふことありけりと、身ながらぞおぼし知らるる。（若菜上五／七八）

無意識のうちの手習いの中に、自分自身の「身」の内側にひそむ「思ふこと」を発見した、その気づきが紫の上を追いつめていく。発病の前夜、紫の上は、「ものはかなき身には過ぎにたるよそのおぼえはあらめど、心に堪へぬもの嘆かしさのみうち添ふや、さはみづからの祈りなりける」（若菜下五／一九〇）と光源氏に告白し、また、「人の忍びがたく飽かぬことにするもの思ひ離れぬ身にてや止みなむとすらむ、あぢきなくもあるかな」（若菜下五／一九四）と思いをめぐらせていた。紫の上の「思ひ」はその「身」につきまとって離れず、病を引き起こすのである。

紫の上は、「この世はかばかりと、見果てつるここちする齢にもなりにけり」（若菜下五／一五二）「さらむ世を見果てぬさきに、心と背きにしがな」（若菜下五／一六二）と出家を願っている。女三の宮の降嫁の当初、「目に近くうつればかはる世の中を行く先遠く頼みけるかな」（若菜上五／五六）とよみ、「世の中もいと常なきものを、などてかさのみは思ひなやまむ」（若菜上五／五八）と嘆いていた。紫の上は、「世の中」の頼みがたさを知り、うつろいやすいものであると気づいてしまった。そして、それを「見果て」ることに抵抗するように出家を望み、「世の中」から退場しようとするのであった。しかし、危篤状態から蘇生したときには「世の中になくなりなむも、わが身にはさらにくちをしきこと残るまじけれど」（若菜下五／二二三）とある。これは、「世の中」を「見果て」た強さなのであろうか。光源氏の悲嘆ぶりに「思ひ起こして」（同）、もう一度生きようとする紫の上は、母故姫君などのたどった運命を越えて、もっと高い次元にある。

七　結びにかえて

女三の宮は、六条院を崩壊に導いた。野村精一氏は、女三の宮に透明さを見出し、この愛や執着と無縁な透明な女君によって、六条院の愛情世界が解体されたことを指摘する。[28] そのように読むとすれば、「世の中を恨みたるやうにて」とされる藤壺の女御の死の影は、女三の宮には見られない。紫の上を失った光源氏には、女三の宮の経を読む尼姿は「この世にうらめしく御心乱るることもおはせず、のどやかなるままに、まぎれなく行ひたまひて、一方に思ひ離れたまへる」（幻六／一三六～一三七）ように見えた。このとき女三の宮が答えた「谷には春も」（幻六／一三七）は、「光なき谷には春もよそなれば咲きてとく散るもの思ひもなし」を引く。女三の宮は、光源氏から隔たった「もの思ひもなし」という世界に静かにある。

女三の宮の透明さは、愛情の問題から疎外された女三の宮のみが得た自由さであり、その「身」に封じ込めた「思ひ」がぎりぎりのところで発した紫の上の悲鳴と、表裏の関係にある。藤壺の女御が呼び覚まし、手繰り寄せた桐壺の更衣や故姫君の生と死を越えたところにある二筋の結末であった。鏡に映したように対照的でありながら、実は二人はよく似た姉妹であり、母たちの生きた苦悩をそれぞれのかたちで照らし返すのではないだろうか。〈紫のゆかり〉の光と影を生きて、二人の藤壺の意味を問う、紫の上の「女ばかり、身をもてなすさまも所狭う、あはれなるべきものはなし。もののあはれ、をりをかしきことをも、見知らぬさまに引き入り沈みなどすれば……」（夕霧六／六七～六八）という述懐と、女三の宮の「かかるさまの人は、もののあはれも知らぬものと聞きしを、ましてもとより知らぬことにて」（柏木五／二九八）という抗議、許されない出家と追いつめられて決断した出家とは、似て非なるものでありながら、響き合う一つの命題の中にある。女三の宮の透明さは、負性としての幼さを最大限に発揮させて、さまざまの「思ひ」を塗り込めた透明さであったかもしれない。

註

（1）「若菜上・下巻の主題と方法」『源氏物語の文体と方法』昭和五十五年、東京大学出版会。

（2）三村「女三の宮の恋ーもう一人の紫の上の行く方ー」『跡見学園女子大学国文学科報』第二十六号、平成十年三月。

（3）河内山清彦氏は、この人物を過去の物語に挿入すると紫の上の存在さえもあやうくなるはずであると指摘する（「『若菜』巻の発端ー秋山虔氏の『方法』の検証ー」『青山学院女子短期大学紀要』第二十四輯、昭和四十五年十一

（4）「右大臣家の女君ー若菜の巻を中心としてー」『源氏物語私記』平成元年、風間書房、四十九頁。

（5）谷村利恵「若菜巻冒頭部における藤壺について」『東京女子大学　日本文学』　第八十七号、平成九年三月。また、橋姫巻になって明らかになる八の宮擁立事件も絡めて考えると、さらに詳細な検討が可能となることについては、神野藤昭夫「宇治八の宮論ー原点としての過去を探るー」『源氏物語と古代世界』平成九年、新典社。
八の宮もまた、過去からよみがえるように登場し、過去に新しい事実をつきつける存在であり、「なほ世に恨み残りける」（橋姫六／二六七）とされる。

（6）神野藤昭夫「よのなか（世の中）」『国文学』第三十六巻第六号臨時号、平成三年五月。

（7）「怨みと鎮魂ー源氏物語への一視点ー」『源氏物語の主題　「家」の遺志と宿世の物語の構造』昭和五十八年、桜楓社、三〇頁。

（8）林田孝和「物語空間と伝承ー源氏物語第二部の始発をめぐってー」『源氏物語の発想』昭和五十五年、桜楓社。

（9）『完訳日本の古典　源氏物語六』昭和六十一年、小学館、十二頁。

（10）藤井貞和「神話の論理と物語の論理」『源氏物語の始源と現在ー定本』昭和五十五年、冬樹社。

（11）原國人氏は、桐壺の更衣の人生をつき動かしたのは宮廷の女たちの恨みであり、光源氏を恨みの果てに誕生した罪の子とし、恨みの因果応報こそが物語をつき動かすという読みを提示している（「うらみの文学ー源氏物語への試みー」『国学院雑誌』第七十六巻第一〇号、昭和五〇年一〇月）。

（12）三田村雅子「桐壺巻の語りとまなざしー〈揺れ〉の相関ー」『源氏物語　感覚の論理』平成八年、有精堂。

（13）長谷川政春「女源氏の恋」『物語史の風景』平成九年、若草書房。

（14）吉海直人「藤壺入内の深層」『源氏物語の視角』平成四年、翰林書房。

（15）吉海直人氏は先帝一族の帝位奪回の手段とし（「桐壺帝即位前史」『日本文学論究』第五十二号、平成五年三月、国学院大学）、小山清彦氏も生き残りを賭けた式部卿宮家の朱雀朝対策を読む（「源氏物語における先帝一族ー第二部『先帝一族』を中心にー」『国文学雑誌』第五〇巻、平成五年三月、藤女子大学）。一方、今井久代氏は、皇権の地位を高めようとする桐壺院の意図を指摘する（「皇女の結婚ー女三宮降嫁の呼びさますものー」『源氏物語の視界4　六条院の内と外』平成九年、新典社）。

（16）即位後の今上帝は、朱雀院の依頼もあり、女三の宮を二品に昇格させるなどの配慮をしている。女三の宮の継母にあたる承香殿の女御の物語からの退場あっての後見ではないだろうか。

（17）増田繁夫「弘徽殿と藤壺ー源氏物語の後宮ー」『国語と国文学』第六十一巻第十一号、昭和五十九年十一月。

（18）石津はるみ「若菜への出発ー源氏物語の転換点ー」『国語と国文学』第五十一巻第十一号、昭和四十九年十一月。

（19）後藤祥子「尚侍攷ー朧月夜と玉鬘ー」『源氏物語の史的空間』昭和六十一年、東京大学出版会。

（20）岡部明日香氏は、秋好中宮が朱雀院の幻の中宮であったとする（「朱雀院論ー桐壺院の遺言からの考察ー」『中古文学論攷』第十九号、平成十年十二月、早稲田大学大学院）。

（21）河添房江「女三の宮粗描」『源氏物語表現史　喩と王権の位相』平成一〇年、翰林書房。

（22）紫の上にあてた朱雀院の手紙にも、「尋ねたまふべきゆゑもやあらむとぞ」（若菜上五／六六）とあり、実際に紫の上は、「昔の御筋をも尋ねきこえ」て女三の宮と対面し、「同じかざしを尋ねきこゆれば、かたじけなけれど、分かぬさまに聞こえさすれど……」（若菜上五／八一）と卑下しつつ、語りかける。

（23）「紫上の挨拶ー若菜巻に於けるー」『源氏物語の研究ー光源氏の宿痾ー』昭和五十四年、教育出版センター。

（24）（1）に同じ。

（25）「『若菜』巻の一問題ー源氏物語の方法に関する断章ー」『日本文学』第九巻第六号、昭和三十五年七月、十七～十八頁。

（26）奈良美代子氏は、藤壺の女御との過去も視野に入れつつ、女三の宮と柏木の密通事件の裏に潜在する朧月夜像とその再登場を読む（「朧月夜尚侍の影ー若菜上・下巻における再登場をめぐってー」『跡見学園女子大学　国

文学科報』第二十三号、平成七年三月)。

(27) 後藤祥子「朧月夜」『国文学』第十三巻第六号、昭和四十三年五月、一一九頁。

(28) 「女三宮」『解釈と鑑賞』第三十六巻第四号、昭和四十六年五月

＊本論文のキー・ワード　紫のゆかり／世の中／恨み／病／鏡像。